紙　碑

# 服部銈二郎先生を偲ぶ

山中　進

熊本大学政創研にて
（2008年８月18日）

元立正地理学会会長で立正大学名誉教授の服部銈二郎先生は，2013年６月９日の早朝，92歳の誕生日を目前にして生涯を終えられた．

先生は1921年７月３日に，当時の東京市牛込区でお生まれになられた．1934年に足立区の尋常小学校を卒業された後は，1939年に東京府立第七中学校，1941年に同大泉師範学校，そして1942年に同校の専攻科を卒業され，同年４月に東京下谷区の東盛小学校訓導となられた．しかし，翌年の２月には現役兵として出兵され，ほぼ３年半にわたって中国大陸で軍隊生活を送られ，1946年８月に復員されている．軍隊生活は過酷だったようで，かつて「今でも，ときどき軍隊時代の夢をみることがあるよ」と言われたことがあった．復員した翌月に台東区立東泉小学校教諭として教壇に立たれ，小学校の教師を務める傍ら，1947年４月に立正大学文学部地理学科の夜間部に入学，1950年に卒業され，その翌年からは東京都立葛飾野高等学校で15年間教鞭をとられている．

先生の研究業績は，論文が166編，著作は単著が12編，共編著が43編，さらに報告書・その他は230（大塚昌利先生による）と，その数は超人的であった．先生は，戦後からの研究遍歴を「坂道の調査から始まり，都心・副都心研究へ，さらに中心地論，地域診断法，世界都市研究，川の手・山の手・海の手論に至るまで，絶え間なく続き，無我夢中で追いかけている間に，ついに『米寿』に達してしまった」（『服部銈二郎都市選集』）と，述懐されているが，常に新たな課題と向き合いながらの都市研究人生であった．

先生は小学校９年，高校15年の教員生活の間も都市地理学の研究に精を出され，地理学評論に「都市機能に及ぼす坂の影響」（1955），「東京周辺における地域構造」（1960），「東京の都心機能と構造について」（1964）などの論文を発表されている．なかでも，稲永幸男，加賀谷一良先生との東京周辺の地域構造の研究は学会でも高く評価され，1961年２月20日（月）の『産経新聞』の１面トップで，「三学徒が初の『地域診断法』完成」との見出しで，「因子分析法の手法を用いて科学的に東京周辺の地域構造を分析」と紹介された．当時の立正の地理は，田中啓爾先生が地理学の応用性に目を向けられ，地理学科に教職コースと応用地理コースが設けられた時で，先生たちの共同研究は地理学界においても，応用地理学の先駆的な研究として位置づけられるものであった．

1966年に先生は立正大学文学部助教授として迎えられるが，この年「東京における中心地の研究」で，東京教育大学から理学博士を授与された．また，1972年に『大都市地域論』で日本都市学会の奥井賞を受賞されている．以後，都市研究に拍車がかかり，1974年に鶯谷駅に程近い所に研究の拠り所となるアーバンアミニティ研究室（当時）を設けられ，この前後に『都市化の地理』（1973），『都市と盛り場』（1977），『盛り場―人間欲望の原点』（1981）などの著書を相次いで上梓されている．この後，先生は「地球は１つ，地域は無数」の発想で，地域を総合的に追究する地域論に軸足を移されていくが，都市の盛り場論，イメージ論，アメニティ論，シンボル論など，新たな都市地理学研究の開拓に大いに寄与された．なかでも，『都市の表情―らしさの表現像』（1984）は，長年の願望であっ

た「都市の表情」解明に都市像と都市誌から挑み，存分に服部都市論を展開された代表的な著作である．これに続く『都市を読む　地域を診る―都市診断学』（1988）では，これまでの研究の論点を集約し，地理学で醸成された地域論からのアプローチを基本に，都市診断学の方法論の確立と発展に多大な貢献をされた．

先生は，1992年に立正大学を定年退職され名誉教授となられたが，それに合わせて『都市　人類最高の傑作』（1992）を刊行された．その後，5年間は立正大学の非常勤講師として大学院の研究指導にあたられた．在職中，先生は大学の教員は教育研究はもちろんであるが，地域・社会貢献や学内の業務をこなして一人前とよく言われていたが，自らは地元の台東区を初め東京都・区，埼玉県，熊谷市などの総合開発や都市計画，産業問題，街づくり懇談会，地域商業近代化，大規模小売店舗，地場産業振興対策など，60余りの各種審議会等の座長・委員を務められている．学内においては図書館長，研究科委員長の要職を，学会関係では立正地理学会会長，日本地理学会評議員・常任委員，関東都市学会・日本都市学会会長，人文地理学会協議員，日本観光研究者連合理事などの役につかれ，1995年にこうした功績で勲四等瑞宝章を受けられた．

先生は，1997年にすべての公的責任から解放され，「わが第三の自由な人生」の始まり，一生の研究テーマである「人類最高の傑作･都市の研究」にのめりこめる時間が多くなったと喜んでおられた．この年に出版された『教養の都市地理学』（1997）では，〝時空人〟の接点で社会経済現象を読み解く「間境論」を，先生ならではの概念図を掲げて論じている．地域の個性を追求する一方で，地域や都市の背後に潜む地表の論理・法則性，地域秩序を追い求めた先生の一貫した姿勢が伺える．また，浅草・上野（台東区）をこよなく愛され，自由な時間の中で随想集『浅草・上野物語』（2003）を出版されている．

奥様のお話しでは，2006年に体調をくずされてから足腰が弱くなられたようである．それでも先生は，60年間にわたる中心的な地理学的構想（大都市問題，都市の表情･シンボル，「三の手」論）をまとめた『服部銈二郎都市選集』（2010）の執筆に全力を注がれている．さらに，研究所の総仕上げと言われて，アーバンアミニティ研究所で学んだ7名のメンバーと『現代日本の地域研究』（2011）を出版されたが，これが最後の仕事となってしまった．先生90歳のときであった．

服部先生は母校の立正大学を，そして立正地理を深く愛し，後輩たちの教育にも熱心に取り組まれてきた．研究面では厳しい姿勢であったが，反面，広い心で後輩たちに暖かく接し，多くの若手研究者を育てられた．現役を退かれた後も，多くの学生や研究者が先生の学恩に感謝し集まりをもったのも，先生の研究姿勢やお人柄に惹かれてのことである．私ごとながら，先生との忘れられない思い出がある．2008年の夏，「山中くんの頑張っているところを見たいね」と言われ，暑い盛りの8月18日から20日の日程で，熊本に御出になられた．87歳のご高齢で体調も万全でない中での旅に，奥様も嘸かしご心配だったことと思われる．初日は熊本大学の「五校記念館」や山間地の集落研究を推進する政策創造研究教育センターなどを案内し，夕刻，九州自動車道と山道をひた走り，球磨川沿いの芦北町吉尾の温泉旅館に宿泊した．やや温めの湯ながら広々とした露天風呂で，温泉大好きな先生に大層気に入って頂いた．翌日は，熊本大学が山間地研究の拠点としている小学校で地域の人たちと歓談されたが，先生持ち前の気さくさと，大らかなお人柄から話も大いに弾んだ．午後は共同でプロジェクトを担っている芦北町の職員と，地域の取り組みなどについて懇談し，この日は空港に比較的近い菊池温泉で疲れを癒して頂いた．夜は地酒を酌み交わしながら遅くまで地理談義に花が咲いた．「いいねー，どんどんやりなさいよ」，いつもの先生の励ましの言葉が，今も耳に残っている．

晩年の先生は，奥様によると1日30分の散歩と朝食後のラジオ体操で体力づくりに励まれていたようである．奥

様の句集「福寿草」には,「お互いに優しさと感謝を忘れずに．年を重ねてもできることはまだまだある」と記され，その横に「恃み合ふ命なりけり滑子汁（真知子)」の句が添えられている．先生の都市研究の活力の源は，やはり奥様をはじめ，すばらしいご家族に囲まれた円満なご家庭にあったと言えよう．先生，長らく立正地理学会のためにご尽力を頂きありがとうございました．謹んでご冥福をお祈りいたします．